

理学部

2008
JUNE

KYUSHU UNIVERSITY

mail magazine for alumni

便り

Vol.6



新しい理学を目指して

Latest News of Departments

物理学科 / 化学科 / 地球惑星科学科 / 数学科 / 生物学科

教育プログラムの紹介 大学院理学府の新しい教育プログラム / 大学院数理学府の教育改革支援プログラム

新任教員の紹介 奈良岡浩教授(地惑) / Hoffmann Tim教授(数学) / 宇都宮聡准教授(化学)

News 主な各界の受賞者 / 理学部・理学府の就職支援 / 新キャンパス移転情報 / 定年退職者

新しい理学を目指して



理学部長 宮原 三郎

ここに理学部便りVol.6をお届けし、理学部の近況をお知らせ致します。これまで六本松地区で実施されてきた全学教育が平成21年4月より伊都キャンパスで開講され、六本松の理学研究院教員は箱崎の工学部跡に移り、六本松および箱崎の数理学研究院教員は平成21年9月に伊都キャンパスに拠点を構え教育研究に携わる予定です。それと同時に、理学部数学科の教育は伊都キャンパスで開始される予定です。理学部の伊都キャンパス移転は平成26年度から2年をかけて行われる予定になっており、理学部に関係する全ての移転が完了するまでには今しばらく時間がかかりますが、学生の教育を最優先に考え、この過渡期を乗り越えていく所存です。

理学府では専攻の再編が実施され、平成20年4月より、「物理学」「化学」「地球惑星科学」の3専攻となり、「生物科学」の大学院教育は、システム生命科学府で行われることになりました。また、平成19年度大学院教育改革支援プログラムが採択され、理学府では「先端研究者と高度専門家育成の理学教育」、数理学府では「産業技術が求める数学博士と新修士養成」のプログラムが文部科学省の補助を得て3年計画で実行されています。詳細は、教育プログラムの紹介記事をご覧ください。

また、理学研究院の教員が参画しているグローバルCOEが2つ採択されています。一つは、理学研究院生物科学部門の藤木幸夫教授をリーダーとする「個体恒常性を担う細胞運命の決定とその破綻」、もう一つは、工学研究院の君塚信夫教授がリーダーをされている「未来分子システム化学」です。数理学研究院・数理学府では、5年間の21世紀COE機能数理学の構築と展開を終え、新たなグローバルCOEに挑戦しています。

このような活動に対する理学部卒業生の皆様の一層のご理解とご支援をお願いする次第です。

このような活動に対する理学部卒業生の皆様の一層のご理解とご支援をお願いする次第です。

大学院理学府の新しい教育プログラム

平成19年度後期より、大学院理学府に新しい教育プログラム「アドバンスサイエンティスト(AS)育成プログラム」が設置されました。理学府では、「国際的な場で活躍できる広い視野を持った先端的研究者、高度な能力と学識を備え社会の広い分野で活躍する高度な専門家を育成する」ことを教育目的に掲げています。このうち、先端的研究者育成をめざして、5年一貫の「フロンティアリサーチャー(FR)育成プログラム」を平成17年度後期から開始しました(理学部便りVol.4参照)が、このAS育成プログラムはもう片方の高度専門家育成をめざそうというものです。

FR育成プログラムは、平成17年度の文部科学省助成事業である「魅力ある大学院教育」イニシアティブに採択されました。この結果、国内外学会への参加補助、独自のリサーチアシスタントの採用など、従来できなかった学生への手厚い支援が可能となりました。また、複数の教員(アドバイザーコミッティー)による個々の学生に応じたきめ細かな指導体制、学生自ら研究を管理するリサーチマネージメント論の指導、院生企画シンポジウムの助成など、学生の研究への積極的取り組みを支援するユニークなシステムも導入しました。それ以来3年近くが経過し、

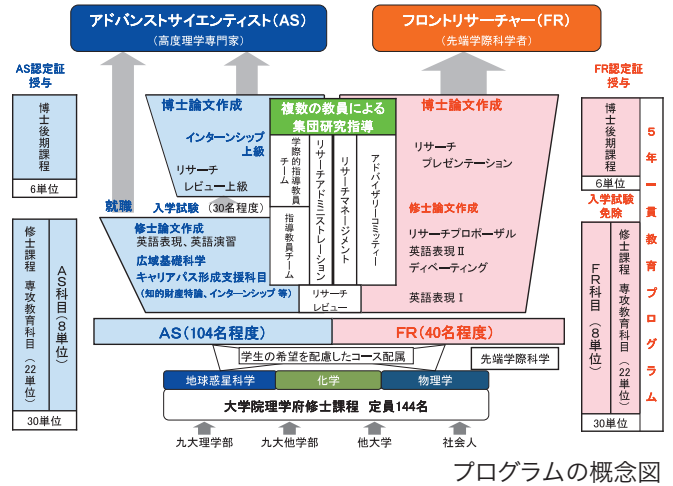
博士後期課程への進学率の向上、学会での発表件数の増加など、優れた成果を挙げつつあります。

しかしながら、理学府に入学してくる学生全てが先端研究者志向ではありません。むしろ、修士課程修了後に就職して、大学院で得た知識や経験を、就職先の企業をはじめとした社会一般で広く生かしたいという学生の方が多数を占めています。そのような学生への教育こそが理学府の教育目的のもう片方の柱であり、AS育成プログラム設置の目的です。AS育成プログラムでは、FR育成プログラムで取り入れた、複数の教員による指導体制やリサーチマネージメント論の指導などの教育システムを、最適化して取り入れています。さらに、科学倫理・哲学、知的財産管理、インターンシップなど、より密接な社会との接点を構築するカリキュラムも導入しています。

平成19年度、文部科学省は、各大学院で掲げた人材養成目的の実現のための組織的、体系的な取り組みを支援する「大学院教育改革支援プログラム」事業を開始しました。理学府では、FRとASの両育成プログラムを中心に据え、加えて専攻独自の専門教育カリキュラムも一層の充実を図り、両者の相乗効果を

めざす新しい教育プログラム「先端研究者と高度専門教育の理学教育(専攻横断教育プログラムと専門教育の融合)」をこれに応募しました。理工農系では169件の応募がありましたが、採択された53件の一つに無事選ばれました。

今後、理学府の学生は、修士課程1年後期からこれら2つの育成プログラムのいずれかに属し、個々の特性に合ったきめ細かな指導を受けるようになります。学年進行に応じた教育カリキュラムの整備を進め、教育目的にかなう優れた人材の輩出をめざしたいと考えています。



大学院数理学府の教育改革支援プログラム

数理学府では、平成19年度、文部科学省大学院教育支援プログラム「産業技術が求める数学博士と新修士養成プログラム」が採択され、現在そのプログラムを推進中です。

この制度は、「新時代の大学院教育」(平成17年9月5日中央教育審議会答申)及び「大学院教育振興施策要綱」(平成18年3月30日文部科学省)等を踏まえ、産業界をはじめ社会の様々な分野で幅広く活躍する高度な人材を育成する大学院博士課程、修士課程を対象に、優れた組織的・体系的な教育取組を進める大学院に対して重点的な支援を行うことにより、その教育の実質化を推進することを目的として平成19年度からスタートされた教育改革支援制度です。全国の国公立大学等から応募のあった355件のうち、126件が採択されました。

我々の取り組みの第一は、修士課程において新しくMMA(Master of Mathematics Administration)コースを設置し学生を育成することです。さらに、博士後期課程においては、機能数理学コースを柱として、本格的な産業技術数理学府の育成を図る基盤を整備してゆくことです。

MMAとは、聞き慣れない名前ではないかと存じますが、技術版のMBAとして国際的な認知度が高いMOTの数学版ともいえるもので、世界に先駆けた計画です。MMAの目的は、数学が背景にある基礎研究の意義を理解し、研究開発のコーディネートやマネジメントを大局観と長期的視野をもってあたることができる人材を育成することです。つまり、数学のもつ潜在能力を引き出し、縦横無尽に機能させることが出来る人材の育成を目的としています。

また、博士後期課程における産業技術数理学府の育成は、純粋数学の教育・研究が中心であったわが国の高度数学教育において、数学の科学技術への応用を主眼におくという点で一石を投じるものです。この計画を3ヶ月以上の博士長期研究インターンシップや産業技術数理学府との連携など、特色あるカリキュラムで遂行していきます。

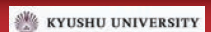
博士課程における長期インターンシップ制度は、数学においては日本で初めての試みでした。他大学の数学教室関係者の関心も高く、この制度についてよく質問を受けます。この試みは、平成18年度から始まり、幸い、いま順調に進展しています。

平成18年度、平成19年度には、毎年9名の学生が長期インタ

ーンシップに参加しました。応用分野の学生は専門を生かして課題に取り組み、一方、純粋数学の学生も画像認識や暗号等のテーマに取り組むという具合に、多くの学生が高い評価を得ています。特許の申請や共著論文に至った学生が2名、複数の実習生が就職の誘いを受け、うち2名が実施企業に就職しました。さらに、実習をきっかけに2件の共同研究がまもなく始まり、ポスドク3名と実習生1名が研究を担当する予定です。

MMAは平成21年度開コースをめざし、本年度は最初の学生募集を行います。これに先立ち、MMAコースでは英語による数学教育も導入することから、その準備として、この4月より外国から特任助教の人を採用し、次年度に先立ち英語の講義を始めたところです。また、同じく4月から、離散微分幾何・可視化を専門とするホフマン ティム教授が、ベルリンより赴任し、当研究院、ならびに産業技術数理学府の陣容が更に充実しました。

平成19年度 大学院教育改革支援プログラム
産業技術が求める 数学博士と新修士養成プログラム



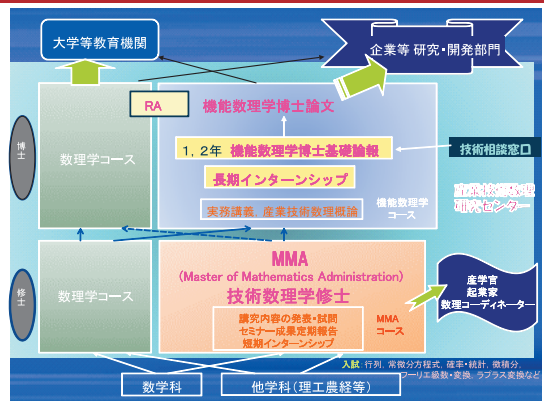
プログラムのめざすもの

数理学を背景におく広い分野における指導的人材の育成
高度職業人MMA(修士)の養成
産業数理学府(博士)の養成

そのための取り組み:・・・技術の基礎を見つめて

- (1) 機能数理学府コース設置 (18年4月)
長期インターンシップ制導入 (3か月以上)
- (2) 産業技術数理学府センター設立 (19年4月)
- (3) 教員人事新制度の確立 (19年4月～)柔軟な人事が可能
- (4) MMAコース開設 (21年4月予定)

プログラムの流れ



<http://www2.math.kyushu-u.ac.jp/gp>

新 任 教 員 の 紹 介

物理学科	中野 智仁	19.11.16
物理学科	藤田 訓裕	20.4.1
化学科	松本 和弘	20.1.1
化学科	栗崎 弘輔	20.1.16
地球惑星科学科	奈良岡 浩	20.2.1

数学科	緒方 芳子	19.11.16
数学科	前川 泰則	20.3.16
数学科	Hoffmann Tim Nikolai	20.4.1
数学科	三枝 洋一	20.6.1
生物学科	松園 裕嗣	20.3.16
生物学科	森下 喜弘	20.5.16

奈良岡 浩 教授

平成20年2月1日就任

【地球惑星科学科】

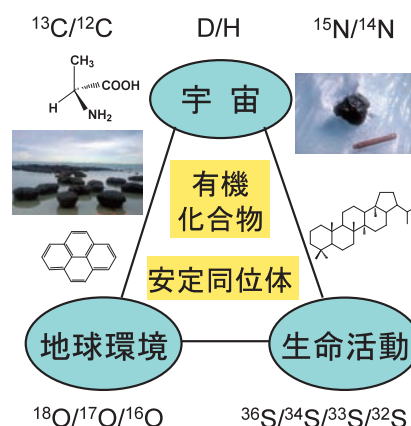
私の専門は有機宇宙地球化学で、宇宙からの隕石、数十億年前の岩石、深海堆積物、陸上植物 プランクトン、さらに熱水環境バクテリアまで幅広く研究対象としていますが、大きな目標は我々生命と地球の成り立ちと相互関係を理解することです。研究手法は自然界の有機物を分子でとらえ、構成する炭素 水素 窒素 酸素イオウの安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$, D/H, $^{15}\text{N}/^{14}\text{N}$, $^{18}\text{O}/^{17}\text{O}/^{16}\text{O}$, $^{36}\text{S}/^{34}\text{S}/^{33}\text{S}/^{32}\text{S}$) を精密測定し、化合物の起源やプロセスを解明することです。

大気中の光反応から生物の酵素反応まで、自然界のほとんどの反応で同位体比

は微少ながら変動し、原料や反応・代謝過程について多くの情報が得られます。今まで多大な時間を分析法開発や質量分析計のおもりに費やしましたが、試料採取のため、南極 オーストラリア・アフリカのフィールドや太平洋の船上に長期滞在して、自然の美しさ・厳しさを味わうことができました。自ら採取した試料を用いて、新発見があると喜びます。

九州大学でも、さらに様々な宇宙地球環境試料を研究し、我々は今どうしてこの地球環境に存在しているのか、化学進化や地球環境と生命活動について理解を深めたいと思います。過去を知り、我々の現

在と未来を考えることが地球惑星科学研究の醍醐味です。



Hoffmann Tim 教授

平成20年4月1日就任

【数学科】

I studied mathematics at the Technical University Berlin, where I also got my Ph.D. in 2000. I have been a fellow of the Alexander von Humboldt foundation, and stayed one year at the University of Massachusetts at Amherst as a visiting assistant professor. I habilitated in 2003 at the Technical University of Berlin. In 2004 I got a Heisenberg fellowship from the German Science Foundation for a stay at Ludwig Maximilians University Munich and I worked as substitute professor at Friedrich-Schiller University Jena, Technical University Munich, and Technical University of Berlin before I came here at Kyushu University. I specialize in the area of discrete differential geometry and mathematical visualization. Discrete differential geometry is a branch of mathematics that aims for formulating discrete analogues to notions from classical differential geometry.

An obvious application of this is of course numerics and simulation. However, in discrete differential geometry, the objects are not treated as mere approximations of smooth counterparts, but as independent subjects themselves and it turns out, that they possess remarkable properties, that help to understand how to make "good" approximations. Discrete differential geometry has strong links to mathematical physics, since the difference equations that arise as discrete counterparts for the partial differential equations that describe the smooth geometry occur there in lattice models. Another area of application is computer graphics. Whenever a computer draws a surface (no matter whether it is a visualization of a vortex sheet in a simulation or a robot in the next block buster movie) it does not show a smooth surface but a triangulation. Many questions that arise in the treatment of these discrete meshes have smooth counterparts in differential geometry and translating them properly helps finding better methods for computer graphics.

For many years now I develop software that is tailored to visualize mathematics (and geometry in particular). The latest outcome is a joint work with colleagues in Berlin and is called JReality (www.jreality.de).

I am happy to be here now and I am looking forward to many interesting collaborations with old and new colleagues.

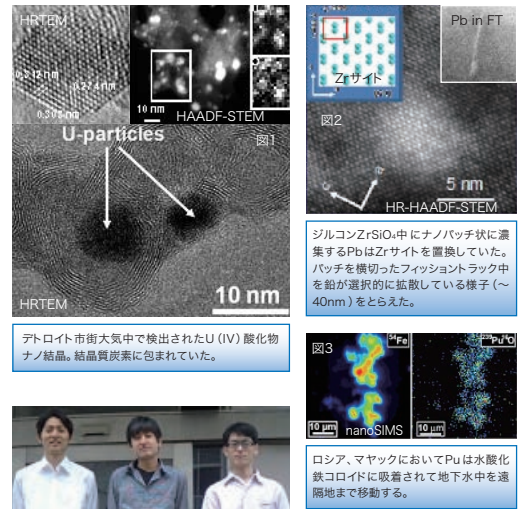


ナノジオケミストリー TEM-Zコントラスト法を用いた地球表層物質中の微量重金属の状態解析

昨年ミシガン大学の地球科学科からこちらの化学部門に着任しました。これまでの、主に、地球表層に存在する様々な物質と重金属、放射性核種の存在状態について、透過型電子顕微鏡法(TEM)を用いて研究してきました。その際、微量(ppmレベル)しか含まれない元素をTEMで検出するのは、局所的に濃集している場合でも、困難でした。そこでTEMの機能のなかで、物質科学の分野で積極的に用いられていた、平均質量の情報直接像として捉える方法(高角環状暗視野走査透過電子顕微鏡法)を、より複雑、不均質な天然の試料に応

用してみました。すると、これまでの高分解能TEMでは検出できなかった、微量重金属のナノ・原子スケールでの存在状態に関して多くの重要なことが分かりました(図1,2)。このような直接観察による状態解析は、我々の周囲で起きる微細な未知の自然現象を明らかにするために大きく貢献できると考えています。

最近では、TEMとそれ以外の分析法(SIMS(図3)やXANES)、また室内実験を組み合わせたアプローチから、微量有害元素のナノスケール挙動を明らかにしようと、4年生2人と一緒に研究しています。



デトロイト市街大気中で検出されたU (IV) 酸化物ナノ結晶。結晶質炭素に包まれていた。



ジルコンZrSiO₄中にナノパッチ状に濃集するPbはZrサイトを置換していた。パッチを横切ったフィッショントラック中に鉛が選択的に拡散している様子(〜40nm)をとらえた。

ロシア、マヤックにおいてPuは水酸化鉄コロイドに吸着されて地下水を遠隔地まで移動する。

Latest News of Departments

物理学科 Physics

砂の物理：
流れる粉体の動力学を明らかに

身近でありながらその物理的機構が解明されていない粉体系にシミュレーションと理論の両面から迫る

物理学科



物理の対象は、素粒子から物性、宇宙まで多岐にわたりますが、今回は、身近な現象を対象とした分野の一つ、粉体の研究を紹介します。粉体とは、砂やガラスビーズといった、目に見えるほど大きい粒の集まりを指します。粉体は、分子の集団とは異なり、熱揺らぎの影響を

受けないため、伝統的な統計物理学をそのまま適用することはできません。砂山をつくったり、それを崩したりといった体験は、誰しもが持っていることと思いますが、粉体の挙動を定量的に記述できる理論は未だ存在しないのです。統計物理学研究室では、粒子間の相互作用をモデル化

して、理想的な状況で数値実験を行い、理論的な考察と比較しながら、粉体の動力学の基礎的な理解を深める研究を行っています。理論と数値実験の比較から、粉体の流動に影響を与える速度相関の発達を指摘した最近の研究は、日本物理学会若手奨励賞をいただきました。



乾いた砂山の表面は、なめらかな斜面をつくる。この傾斜よりも表面を傾けると、砂は流れ出す。



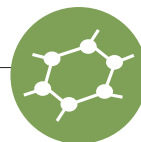
粉体を湿らせると、粒子間に引力が働いて振る舞いが大きく変わる。



斜面を流れる粉体のシミュレーション。粒子同士の相互作用力が、粒子間を結ぶ線によって示されている。

分子の協調的な運動による 分子機能発現のしくみ

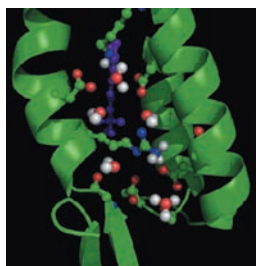
化学科



クラスター化学からのアプローチ

分子を何個集めたら液体や固体の性質をもつであろうか? クラスター化学の研究は、このような素朴な疑問に対して回答を与えることを目的の一つとしており、1980年頃から急激に発展しています。平成19年度に発足した文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「分子高次系機能解明のための分子科学—先端計測法の開発による素過程的理解」は、クラスター化学、溶液・界面、生体分野の研究者の連携により、分子がどのように協調的に運動して分子機能を発現するかについて解明することを目指しています (<http://www.res.titech.ac.jp/~kiso/koujikei.html>)。構造化学研究室は、このプロジェクトにコアグループ(A01

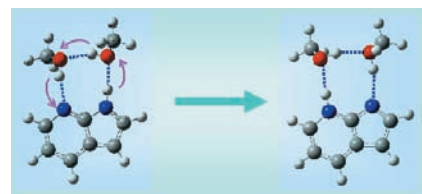
班長 関谷)として参加し、分子クラスターの構造、分子間相互作用および反応ダイナミクスの



バクテリオロドプシンにおけるプロトンポンプ (阪大 水谷泰久教授提供)

研究を行っています。最近、孤立気相において7-アザインドールに水やメタノールなどの溶媒分子が結合したクラスターを生成させ、これらの分子に紫外光を照射すると、水素結合ネットワークを構成している溶媒分子の協調的な運動により多重プロトン移動が起こることを発見しました。多重プロトン移動は、バクテリオ

ロドプシンにおけるプロトンポンプによるエネルギー輸送や緑色蛍光タンパク質の発光過程において主要な役割を果たしています。分子クラスターの研究から得られた情報が、プロトンポンプなど実在分子の機能発現のしくみの解明に繋がるのが期待されています。



7-アザインドールとメタノールクラスターにおける3重プロトン移動

地球惑星科学科 Earth and Planetary Sciences

月裏側の重力場を世界で初めて観測して、 月の起源と進化の謎に迫る

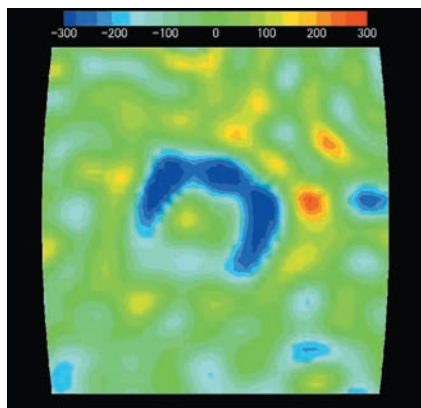
地球惑星科学科



アポロ計画以降、初めての本格的月探査機「かぐや」リレー衛星搭載中継器ミッション

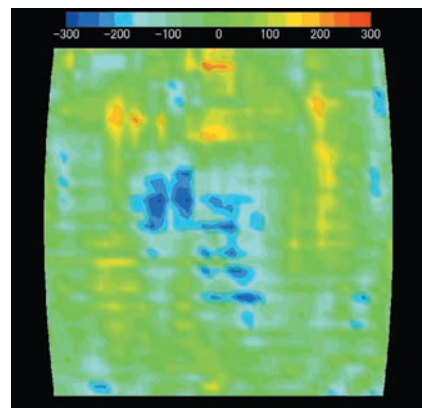
07年9月に打ち上げられた日本の月探査機かぐやは小型衛星を経由して月裏側の重力場を観測しています。私達、九州大学グループもこの観測に参加し、月重力場の解析を行っています(図左)。月は常に同じ側(表側)を地球に向けているので裏側の重力場はこれまでほとんど分かっていませんでした。例えば、アポロ盆地は、図右のようなモデルが作られていました。図の色は重力場の強さを示し、青、緑、黄、赤の順で強くなります。青色は負の重力異常を表し、地形の凹みや、地下に軽い物質が埋もれていることを示しています。二つの図を比べると、これまでぼんやりとしか見えていなかった重力異常が明瞭に捉えられるようになったことがわかります。かぐやの観測

によって、表側と裏側にははっきりとした重力異常の違いがあり、地下の構造や形成の歴史が異なっていたことが発見



かぐやの4ウェイドップラ観測データを解析して得られたアポロ盆地(南緯36度、西経150度、直径 500km)の重力異常図。アポロ盆地は月の裏側にあり、その重力異常はこれまでほとんど分かっていませんでした。

されました。最新の観測データは、月の起源と進化の研究に大切な役割を果たすでしょう。



かぐや以前の古い月重力場モデル(LP165P)を用いて作成したアポロ盆地の重力異常図。左と右を比較すると、これまでぼんやりとしか見えていなかった重力異常が、かぐやの観測によって、明瞭に捉えられるようになったことがわかります。

数学科 Mathematics

大学院数理学府の新教育プログラム 博士長期研究インターンシップの現況

数学科



大学・産業界のいずれでも活躍できる若手研究者の育成を目指してこの2年間に18名が実習を体験

数理学府は平成18年度に博士後期課程・機能数理学コースの学生に対する3ヶ月以上の博士長期研究インターンシップを開始しました。本コースの学生は、これまで培った専門知識、数学の普遍性や論理的思考力を基に、必修科目であるインターンシップを通して、社会でも通用するスキルの獲得を目指しています。

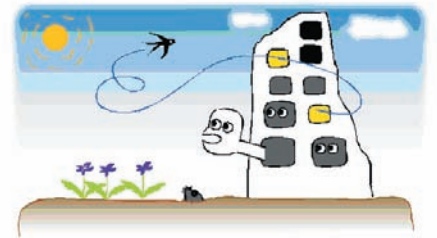
本プログラムは3年目を迎えましたが、既にこの2年間に計18名の学生が、NTT、東芝、宇部興産、日立製作所、大日本インキ化学工業、日本IBM、三井造船、ゼツタテクノロジー、日新火災、富士通、松下電器、マツダの12社において実習を体験しました。学生の専門は、数理統計、数値解析、計算機科学、流体力学、ゲーム理論、確率論、数理物理、関数解析、数論、代数幾何、

トポロジーと多様ですが、全員がしっかりと実習をこなしています。

数学の博士課程の学生によるインターンシップは国内初の試みであったため、最初は企業も教員も半信半疑と言った風でしたが、幸いにも順調な滑り出しを見せています。実際、特許申請や著論文の投稿のほか、想定外の優れた結果を導くなど極めて高い評価を獲得した学生も少なくありません。また、数名の学生が実施企業から就職の誘いを受け、2名が就職しました。さらに実習をきっかけに、今年度から日新火災やマツダとポストクを雇用しての共同研究が始まりました。

また、学生にとっても外の世界を体験したことは刺激的で大きな財産になったようです。企業の組織的な研究の強靭さ

に感嘆し、仕事を任される責任感に新鮮さを覚え、社会における数学の有用性を実感するなど、有意義な体験だったことが彼らの報告から伝わってきます。彼らは数学を取り巻く環境の変化に対応し、未知の世界に果敢に飛び込み数学の価値を社会に示してくれました。次は我々教員が彼らを見習う番のようです。



生物学科 Biology

生命科学の学際的進展をリードする 大学院教育へ

生物学科



ポストゲノム時代の新しい生物学を目指して

今年の4月1日から、理学府生物学専攻に属していた教員がすべてシステム生命科学府に属することに成りました。

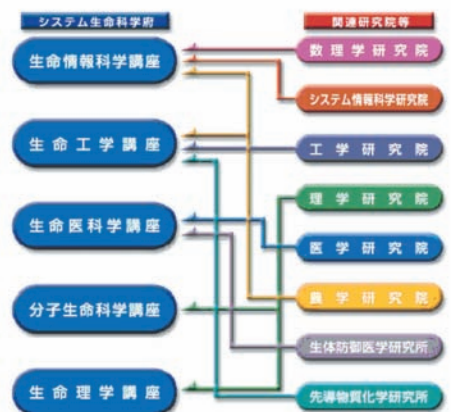
生物学のここ数十年の進歩はいちじるしく、農学や医学などの応用分野の研究者とも一緒になった大学院組織が急務とされていました。九州大学では、さらに情報科学や数学なども加わって、大学院生を教育する組織としてシステム生命科学府が5年前につくられました。しかしこれまでは理学研究院の生物学の教員のうち一部だけがシステム生命科学府に参与し、のこりは理学府に属していました。今年度から大学院教育は全部の教員がシステム生命科学府に属

して行くことになりました。

急速に伸びつつあるこの分野で、幅広い教育を受けた大学院生を育てる組織として、九大は強力なものになったといえます。

しかしキャンパスが分かれていることからくる問題があります。工学の教員に指導を受けている大学院生は伊都キャンパスに、理学や農学の教員につく大学院生が箱崎に、また医学キャンパスにいる大学院生と、離れた場所にいる大学院生が指導を受けられるように遠隔地授業を行っています。

システム生命科学府に関連する研究院等



【主な各界の受賞者】

- 御手洗菜美子（物理学部門・助教）
第2回（2008年）日本物理学会若手奨励賞（2008年3月）
- 桑野良一（化学部門・准教授）
科学技術分野の文部科学大臣表彰 若手科学者賞（2008年4月15日）
- 迫田憲治（化学部門・助教）
分子科学討論会優秀講演賞（2007年9月）
- 栗崎弘輔（化学部門・助教）
九州分析化学奨励賞（2007年7月26日）
- 若山正人数理学研究院長、中尾充宏産業技術数理研究センター長
科学技術政策研究所 平成19年のナイスステップな研究者
- 植平賢司（地球惑星科学部門・助教）、松島健（地球惑星科学部門・准教授）
JGN2アワード「アプリケーション賞」（2008年1月17日）

OB・OG
メッセージ



今林隆史さん 99年地球惑星科学科 卒業
01年地球惑星科学専攻 修了
Takafumi Imabayashi RKB毎日放送

『殺人』『放火』、そして最近『選挙』。

日々の仕事の対象は、理学部で学んだこととは無縁に見えるものばかりです。地球惑星科学専攻を修了後、就職したのが放送局。現在、報道部の記者として様々な現場を駆け回る毎日です。

ただ、無縁に見えても、原因の追求（誰が犯人か!）や結果の予測（誰が当選するか!）など社会で起きている現象を見る時には『理学』の思考法も生きてきます。さらに、最近是中国の砂漠で黄砂発生源を取材するなど（写真）、自然災害や環境問題など『理学』そのものが取材対象となることも増えています。理学部で学んだことがいろんな形で生きてると実感する毎日です。

同窓会からのお知らせ

平成20年8月23日に学士会館（東京）で理学部同窓会関東支部第5回総会ならびに懇親会を開催いたします。また、秋には同窓会特別事業を開催いたします。卒業生の皆様の多数のご参加をお願いいたします。また、同窓生の増加に伴う経常的な負担に対応するため、今年度より年会費を導入することになりました。詳細は同封の案内をご参照ください。該当される卒業生の皆様方のご負担をよろしくをお願いいたします。なお、今年度は同窓会名簿を発刊いたします。多数の会員の方々にご購入いただきますようお願いいたします。

理学部・理学府の就職支援

理学部の各学科では理学部卒業予定者に企業の採用担当者から直接説明いただく企業説明会を随時行っています。説明会を希望される場合は、各学科の事務室宛ご連絡下さい。就職担当教員から折り返し連絡いたします。

各学科の事務室の電話番号

物理学科	TEL 092-642-2541
化学科	TEL 092-642-2608
地球惑星科学科	TEL 092-642-2696
数学科	TEL 092-642-4201
生物学科	TEL 092-642-2643

新キャンパス移転情報

現在、六本松地区等で行われている教育研究を、平成21年4月までに伊都キャンパスへ移転、始動させることを目指して、工事等準備が進んでいます。

このうちの数理学研究教育棟、理系図書館増築部分に、建設工事スケジュールを変更せざるを得ない状況が生じました。

これらは、平成19年9月着工、平成20年12月竣工予定で、建設会社と工事契約を結んでおりましたが、建築確認審査期間の長期化などを理由に、未だ工事に着手していません。このため、請負業者との契約を解除しました。

今後、早急に新たな業者と契約し、平成21年10月の移

転開始を目指しています。

なお、平成21年4月に六本松地区が伊都キャンパスへ移転開講する計画、並びに移転の全体計画に変更ありません。（詳しくは九大ホームページをご覧ください）

■移転スケジュール（平成18年9月）

時期	第Iステージ 平成17～19年度	第IIステージ 平成20～23年度	第IIIステージ 平成24～31年度
伊都キャンパスへの移転	工学系トII 理系図書館I 【約5.2千人】	全学教育、比較社会文化、言語文化、 数理学研究院、理学部数学科、 理系図書館II、 高等教育関連推進センター他 【5.6千人】 基幹整備及び新手法による整備 （用地再取得 平成25年度完了）	理学系 H26） 情報基盤研究開発 センター（H27） 中央図書館 H29） 文系 H29、H30） 農学系 その他 H31） 【約7.9千人】

※)内数値の移転年度は、財政状況により変動することがあります
※ 【内数値は移転人数の概数を示しています

定年退職者

次の7名の先生方が2008年3月31日をもって退職されました。

化学科	前田 米蔵	地球惑星科学科	本村 慶信
数学科	風間 英明	生物学科	藤 義博
数学科	中尾 慎宏	生物学科	杉山 博之
数学科	坂内 悦子		